
成功率75%

もう振り向かず歩いてゆけるさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成功率75%

【Nコード】

N8874K

【作者名】

もう振り向かず歩いてゆけるさ

【あらすじ】

1、東京魔法学園高等部には世界の魔力最大値 萩原梓（16歳）がいる。

2、萩原梓の魔法成功率は75%である。

3、これは、萩原梓の学園物語である。過度な期待をしてはいけない。

そして、最後に、、、

萩原梓は決して最強ではないが、最弱でもないが、普通でもない。
秘めた力はどんな魔法でも、それが初級魔法、基本魔法でも成功率
が75%だというものだけだ。

第1% 始めは75%から(前書き)

もしかしたら・・・すんごい、すんごい後で(続くか不明)残酷な描写がぁ・・・ないよなぁ・・・多分。

なんというか、楽しんでもらえたら幸いです。

第1% 始めは75%から

「むむむむむむー!!」

ドクンドクンと胸を打つ鼓動。

俺が今なそうとしている事は、それほど緊張せざるおえない事なのだ。

(「成功率は75%…俺を信じる…」)

(「俺!!」)

カツと目をかっぴらく。すると瞳孔の周りを囲うようにしてきかかない文字が浮かび上り、青白く光り出す。

瞳孔の周りが青白く光り出したのをきっかけに、男も青白く光り出した。男はゆっくりと右手をあげると、今度は男が立つ地の周りが青白く光り出す。

よく見ると、男が立つ周りにもきかかない文字が男を囲うようになって出来上がっていた。

ドーナツ型に男を囲む文字、その真ん中に立つ男はニヤリと笑う。

「コオオオオオオオ」

という神々しい効果音とともに、文字の円の内側、(ドーナツでいう真ん中の穴が開いたところ)に六芒星が浮かび上がった。

「ふう……………」

男は、僅かにあった額の汗を袖で拭う。

疲れた。まずは第一関門突破だ。

次…次！

男はふうと一息吐き口を開く。

「塵よ、火となれ。」

因みに、昨日はここで失敗したのだ。

失敗し、爆発した。

しかし、今日は…今日だけはダメだ！

失敗はできない！

そんな思いが天に通じたのか、ボワツと力強い赤い火が灯った。

（「やった…」）

男は心中ガッツポーズをとる。

問題は次だ…。

男を知っている人間ならば誰もがこう思うはずだ。

“必ず失敗する”と。

次…

次が成功すれば、見直してくれる奴もでてくるだろう。

男も心の底では失敗することがわかっている。

しかしだ、しかしそれを認めたくない。

認めれば負けだ。

人間には無限の可能性があるのだから！！

「うおおおお」の掛け声とともに男は両腕を前に突き出した。

ブワツと男を取り巻く青白い光りが、さっきより輝きだす。

すう〜、はあ〜。

（「よしっ！！」）

「火よ、天を焼く却火と化せ！！」

ゴウツ！

という音とともに、突き出した両手の前にある火が、勢いよく燃え

上がった。

男はそれを見て「やったか？」と呟く。

どンドン炎と化した火は膨れ上がり、やがてピカッと光り

「成功だ！！やった！やった！……」

ドッカーン！！

爆発した。

「萩原 梓（男 16歳）

0点。」

梓は意識が朦朧とする中、明らかにわかりきっていました。と言わんばかりの声を耳にし、「はい」と短く応えてカクツと気絶した。

「先生、梓が気絶してますよ？」

「……………後で保健室に連れて行きます……………」

萩原 梓

学年トップの魔力をほこる学生。

しかし、彼には微妙な欠点があった。

それは、どんな魔法でも成功率75%。

普通は魔力に応じて魔法が使えるのだが、梓は使えなかった。

どんな弱い魔法でも成功率は75%。

ただの75%ならば、たいした問題ではなかっただろう……………。

しかし、彼の75%は普通じゃなかった。

まず最初75%

次に100 - 75 = 25、そして75 - 25 = 50%

次に100 - 50 = 50、50 - 50 = 0%。

梓の75%は最初だけ。

梓の75%……つまりは魔法の成功率は、100を現時点の成功率と

必ず引いて、そして出てきた答えと100を引く前の成功率とまた引くのだ。

つまり、三回目で梓の成功率は0%になる。

しかし、それはさっきのように、一回の魔法で行動を数回起こす場合だけだ。

魔法陣（奇怪な文字の円）を必要としない魔法ならば、普通に75%。

魔法陣を必要とする魔法ならば50か0%。
ということだ。

「萩原：お前は どうして魔導師になりたいんだ？」

梓は気絶した後、先生に保健室に連れられた。

先生は暇なのか梓が目を覚ますのをずっと隣で待っていたのだ。

先生は男：俺も男。

梓は若干気持ち悪く感じながらも、それを心の最深部の三歩ほど手前にしまいこんだ。

「一族が魔導師ならば、俺も立派な魔導師を目指す。普通ですよね？」

「はあ…固定観念…。」

梓はその言葉にムツと眉をひそめた。

「0%が必ず失敗。も固定観念でしょう!？」

「0がなんで0なのか知っているか？」
くっ…。

反論の言葉が思いつかない。

さっきは、適当に反論したが、今回は無理だ。
しかし、梓は思う。

反論しなければ、自分を否定するみたいだと。

「75%は俺の個性です！個性を育てるのが先生の仕事でしょう！」
「75%が個性？短所だろ。」

「長所ともなりえます！」
先生はまあその通りだ、と呟き、保健室から消えた。
無詠唱で魔法か…。

梓はぽくつとさつきまで先生がいた空席を見つめる。
俺の特徴が成功率75%。馬鹿みたいだ…。
自虐してみる。
しかし飽きた。

ああ…成功率があともう5%あれば…。

そんな、ことを考えていると、突然先生が保健室に現れた。
もちろん、さつきの先生だ。

「萩原、これ見てみる」現れてすぐ、数枚の紙を梓が寝ているベッ
トに投げ込む。

梓は、その紙の内容を予想しながらも手に取った。

萩原 梓

高等魔法学0点

召喚学50点

基本魔法学97点

癒魔法術0点

成績表だ。

梓の成績は、召喚（魔法陣 使用 連続二回行動）50点なのは、
安定しないからだそうだ。

基本魔法は魔法陣を使用しないため75%の成功率。

他は魔法陣使用 連続三回行動なので0だ。

梓は苦い顔をしながら成績表に目を通していった。
最後の“先生からのアドバイス”には、

“魔導師を諦めましょう。”

と書いてあった。

アドバイス…え？

みたいな感じだ。

「萩原…0が一つでもあつたら魔導師にはなれないんだよ…わかるか？」「……………」

「ここは、天下の魔法学園 東京魔法学園だぞ？本当のこと言うと、0が一つでもあれば進級は不可なんだよ。」

（「しつてるさ…」）

「お前は魔力推薦で入ってきたが、普通なら入れないぜ？」

梓は上半身を起こし先生を見た。

先生は、とても嫌な目をしていた。

「ちよつとは頑張ってみるよ、75%止まりなんてありえないんだからさ」

それから散々 梓を遠回し馬鹿にして、保健室から去って行った。

出るときはドアできちんと出ていきやがった…。

「なんもわかってないねえ」

「……………いたの」

「さっきね、先生が出たときテレポートしてきた」

「そう…」

梓の寝ているベットの隣で腰をかけている女が梓に笑いかける。

梓は曖昧な笑顔で返した。

魔法を諦めてもいいと感じた時はある。

でも、諦めるわけには…いかない。

理由は…ない。

「つか、麻衣は授業どうしたん？」

「君がぶっ倒れたっつーから駆け付けてきてやったぜ」

「嘘こけ、ばつくれたかつたんだろ」

「バレました」

麻衣は舌をちよろっと出しニコツと笑った。

この女…。

それを見て殺意が芽生えたのは、隠しておこうと思う。

麻衣、北岡 麻衣

梓の幼なじみ。

因みに、梓とは違うクラス。

(「ああ…寝ようかな…」)

次の科目は召喚学。

授業をしたところで成功率は50%。

だったら、勉強するだけ無駄かな？

梓がそんなことを考えていると、麻衣が言った。

「授業受けてよね、次は合同授業じゃん。」

梓は暫く考えて、「んじゃサボるか。」

淡々と麻衣に返した。

「んでだ、

数分後」。

「魔剣、魔法、魔眼を使うにせよ、基本召喚は必須です。」

梓はA組とB組の合同授業、召喚学を校庭で受けていた。

A組は武装しての登場。俺らB組は私服という、一見 Bは期待されていません。みたいな感じだが、それは違う。

魔法学を勉強するとき、自分は何を専門に勉強するかを、決めて勉強するのだ。

昔は文系 理系と二つであっただけだが、今は違う。

魔導系

癒魔系

魔剣士系

召喚系

と魔法は四つに分かれていて、武装しているA組は魔剣士、後のB

C Dは私服となっている。

魔剣士は、根本的に授業方法が違うので、魔剣士だけが武装するのだ。

まあ、合同もあるのだが。

因みに麻衣は魔剣士科なのでA。

「例えば、魔導！魔力を借りるために召喚…魔剣士！力を宿すために召喚！癒魔！回復術を速めるために召喚！そして、召喚士！これは言うまでもありませんね？」

専攻の先生は、年齢170となる、ピチピチお姉さん。

癒魔の発達で、人間の平均寿命が大幅に延びたとか何とか…

どうも、体の劣化をかなりおそめることができるらしい。

そっちが専門じゃないので、俺も基本的なことしか知らないが…。

「では、見なさん！移動しますよ。」

第1% 始めは75%から(後書き)

判りづらい？場所があったと思います？多分。

んで、自分でも少し意味不明かなあゝなんて思ったところについて説明していきたいと思います？(ネタバレかも んでも後書きw)

梓の魔法成功率についてゝわーわー。k t k rとか思った人いそうで・・・いなさそう？

梓の成功率計算ゝ

最初は75%です。

次の連続魔法(魔法陣を使ったとき)の計算ですが、

(75 + 75) - 100 = 連続二回目の成功率(50%)です。

次に、連続三回目です。

最初の連続二回目の計算で気づいた人もいると思いますが、梓の魔法成功率の計算は、その前の成功率(連続三回目なら連続二回目の成功率、連続二回目ならその前の75%)を×2して(必ず)100を引いたものです。

ではいきましよう。

(50 + 50) - 100 = 連続三回目の成功率(0%)です。

50とは、連続二回目の成功率ですね？

暇なので連続四回目の計算もしてみましょー

(0 + 0) - 100 = 連続四回目の成功率(-100%)です。

つか、計算しなくとも、考えればわかりますよね・・・んでも一応梓の成功率は連続四回目で・の符号がつくんですねゝ。

んで、連続五回目はー

(-100 - 100) - 100 = 連続五回目の成功率(-300%)

鬼畜ですw

まあこんな感じですよw

誤字脱字があつたかもしねませんが、そこは見逃してください。

第1・5% 召還は二度としたくありません。(前書き)

暖かい目で見てください。

第1・5% 召還は二度とたくありません。

そいでー・・・移動しましたー!!
見てください。

見渡す限り、草！城のような学校！木！

という、いたって普通の校庭!!

「召還学とは、何か・・・わかる人はいますか？」

自称 新ギヤルの先生は、周りにけだるそうに立っている生徒達を見回しながら、聞く。

召還学とは何か・・・。

「召還について学ぶことでしょうか？」

と、梓は深く考えずに答えた。

どうせ、間違っではないだろう。

読んで字の如くではないか。

しかし、先生は首を縦に振らなかった。

「はい、萩原君。間違っではありません。しかし、あってもいませんので、2点減点です」

「減点ですかっ!？」

「減点です」

この女、鬼畜王エンドでも目指しているのか・・・？
ランスか!？ランスなのか!？

梓以外の生徒は、「ああ、やっちまったな。」「ドンマイ・・・」

「あの先生の問題は解いちゃあダメでしょう」
とかなんとか・・・。

・・・しるかよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
んな、鬼畜王エンド目指してる先生だとは思わなかったよ!!!

「ドンマイ 梓」

と隣の、眼鏡が言ってきた。

「お前、この人の授業初めてだろ？」

「お、おお。」

年齢、170のこの先生 飯島 裕香は、萩原にとって初めての先生であり 隣の眼鏡（黒澤 秀人 くるさわ ひでと）にとっては二度目となる先生のわけで・・・。

裕香先生は、校内でも「あの人は鬼畜だ」と噂されるほど、生徒達の点数を下げていくらしい。

こういう、先生の会話の中に現われる問題「息抜きに考えを聞かせてください」みたいな問題でさえも、自分が「答え」と認識している「答え」と違いは 間違い&減点。となる。

「秀人・・・お前それ先に言えよ。」

と梓は、がつくりうな垂れる。

秀人は小声で悪い悪いアハハハと笑うだけで、梓をより一層 怒らした。

減点2・・・痛い。

「召還学とはですね・・・召還をする際にどういった事を行うか？また、どんな精霊がどんな方法で召還されるか。を学ぶことです。」

裕香先生が人差し指を立てて説明し始めた。

コイツは長引きそうだ。と梓は少し面倒だと思った・・・が、こういう意地悪先生はきつと、自分の話を筆記テストで出すことだろう。

「3457年、フリメアで1人の天才が生まれました。 その天才の名前が」

途中梓は、話を聞くのを止めた。

秀人が「この先生の筆記は教科書の問題だぞー」と教えてくれたからだ。

退屈だなあ〜・・・。

数分後〜。

やっと、終わった・・・フッフッフ・・・。
ここから、俺の時代だぜ。

なんせ、今は・・・。

召還実習なのだから！！！！

「なのだから！！！！」

周りにいる生徒が訝しげな目を向けてきたが、関係ない。

梓にとって召還実習は大切な・・・大切な・・・？

そこまで、大切ではないがやる気が少し出るものなのだから。

「さーて・・・、大物でも召還しますかー」

と梓は手首をゴキゴキ、片をゴキゴキと鳴らして気合を入れる。

（「大物出したら、皆驚くだろうなあ〜」）

ニヤニヤ・・・。

「お、ありゃあA組の奴らじゃねえか？」

と1人の生徒が呟いたのが聞こえた。

A組・・・？どうして？と梓は疑問に思ったが、すぐに思い出した。

ああ・・・そういえば、今日はA組と合同授業だったつけ・・・？

ガシャンガシャンと鎧が出す独特の音が聞こえてきた。

A組が遅い原因は、この鎧・・・というか武装にあった。

A組は、魔法剣士専門の組なので武装が必要なのだ。武装がいかに
関係ない授業でも・・・だ。

「お〜・・・あちらさんはカッコいいなあ〜」

と、またしても隣にいた秀人がひゅ〜と口笛を吹く。

カッコいい・・・？そうかあ？

と梓は首をかしげた。

「魔剣で召還ねえ・・・パワーどんだけ上がるんだろうか？」

と、今度はショートヘアの女の子が言う。

「ただだけパワーあがるんだろぅな〜・・・」

「ってうおいい!!!いつのまにっ!?!?」

ヒラリと、前を向いていた顔がこっちを向いた。

ピンクの髪がヒラヒラと動く。

「僕は結構前からいたよ?」

「沙希ちゃんは、結構前からいたぞー?」

と秀人も言うってくる。

「いたか・・・?いや、そういわれてみれば、いたような気もしなくは

ない かもしれないよぅな・・・」

「そ、そうか・・・まあいいや」

「いたから何だというのだ!」

とっ・・・因みに、このピンク髪。ピンク目、背は中学2年生並の女の

子の名前は、竹田^{たけだ} 沙希^{さき}とって、お嬢様らしい。

「つかA組はかっこいいのに、B組は冴えないねえ〜」

と沙希が苦笑する。

確かに・・・魔導師専門のB組はウィザーハットすらかぶらないとい

うのに、A組は鎧と各々武器〜。

なんだ、この差は・・・

まあ、しょうがないんだけどね。

「いいから、召還しちまおうぜ。」

「お、いいね。一杯いきますか?」

「かみ合っていないよ?沙希ちゃん。」

と、俺たちは召還を始めることにした。

B組はいいなあ〜、バリバリ制服でー。

うちの学校制服可愛いのに、鎧でー・・・。

はあ。

(「梓きてるかなあ〜。まさか、まだ保健室に。。。」)
麻衣がボケーっと考えながら歩いていたら、クラス委員長の橘君に
「ボケっとしなさい!」と怒鳴られた。

橘君は男で、私は女。

扱い方つてもんがあるんじゃないの？

とか思いながら、「はい」と短く答えて姿勢を正した。

魔法剣士科のB組は、いわば兵隊予備軍である。

普通のB組やC組などは違って、規則が厳しい。

私語は勿論厳禁、常に耳を傾ける。

授業中、小声で愚痴することもできないし、隣の生徒と話すこともできない。

良き生徒でなければならぬのだ。

(「橘の奴が、委員長の奴が聞き取りの魔法なんかによつちーの使えるから、規則守るしかないじゃない。。。」)
と、麻衣は心の中で愚痴りまくった。

くそ。。。なんだつてのよ。あー。私も魔導科にすればよかった。あまりにも日ごろのストレスと怒りが募っていたので、友達の由梨花の「召還実習」適当に召還してこいだってさー」という声もしばらく理解できなかった。

二回目の「麻衣?」という声によって、ようやく愚痴るのを止めた。
「ん。。。んー、んじゃあ私 向こういくから。」

と麻衣はB組がたまっているほうを指差し由梨花に言った。

由梨花は、「ああ〜梓君とか秀人君とかの。。。んじゃあ私もいこうかな〜。」と意味深な表情で麻衣を見る。

なんか、この頃そうだ。

B組の話をするたびに、由梨花は意味深な表情で私を見るのだ。
なんだろう? まあいいや。。。

「そう? んじゃあいいこーか。」

「え。。。? あ、うん 了解」

二人は歩き出す。B組のもとへ。

「はぁ・・・。。ふっ」

梓の瞳孔の周りに青白い奇怪な文字が浮かびあがる。

そして、地には同じような奇怪な文字と、その中心に囲まれるようにしてある六芒星が描かれている。

さて・・・。

ここからが本番だ。

次の成功率は50%。

二分の一・・・。

よしっ!!と、梓は意を決しかのように目をかっぴらいた。

そして、梓は口をあけー・・・

「私の呼び声が聞こえ者、私の呼び声に応えよ。」

ピカッ!!と魔法陣がより一層さつきより輝きだした。

コオオオオオオよ神々しい光。

そして、、、、

何かが起こる。はず。

梓は待った。

声が聞こえるのを・・・。

一年前くらいに、教科書でみたのだが、召還が成功したら精霊の聲がどこからか聞こえてくるらしい。

きてくれきてくれ・・・と梓は神頼みを始める(心の中で)

すると、梓の願いがかなったのか・・・

コオオオオオオと、また魔法陣が点滅しはじめ、

「汝、我ヲ呼ブ者力・・・。我、主ノ声ニ応エヨウ。」

と重い声が聞こえてきた。

や、、、やった!!!!!

成功したぜ・・・へへへ・・・やっと。

梓の召還学においての成功とは、召還できるかできないか。ではな

く、精霊に自分の声が聞こえたか、聞こえなかったか？

という、それ以前の問題である。

召還できないか できるか。も正しいが、実際はそういうことだ。

「おーい！俺の召還成功するぞー、見に来るかぁ？」

因みに、梓以外の生徒の梓的に言う、「成功」とは、呼びかけに答えてくれるか？答えてくれないか？

もしくは、精霊を呼び出せる魔力があるか、ないかである。

「僕も、成功かなあ。」

「わかんねえーよな。」

と二人は曖昧な返事を返してきた。

そりゃあそうだよな。梓以外の生徒はこれから失敗する確立もあるのだから。

何が出るかな？何が出るかな？と梓は浮かれていたときだった。

ん・・・？揺れたか・・・？

と思ったのは刹那、地面が激しく揺れ始めた。

ゴゴゴゴと、木々が倒れる。

生徒達は、あまりの振動で地に両膝をつけた。

「お、おいおい・・・地震つてやつなのか？」「キャーキャー」「ちよっちよ・・・うわつと」「学校内やばくない？」

とか、あらゆる方向から生徒達の声が聞こえてきた。

(「地震・・・？ありえねえぞ・・・」)
マンツルの変動は、魔法が発達したいま「ありえない」といわれている。

よって、地震は起こりえない。

しかし、今起きている揺れは地震だろう。

「ど、どうなっているんだ・・・。」

皆の疑問の答えは梓の前に現われた。

ゴゴゴ・・・と、マンホールの10倍はあるだろう黒い穴が現われ

それ以上なにをすればいいのか、わからないからだ。
途中、先生がきて「梓君・君、ティールンなんてよく召還できたね・・・」とか言ってきた。
ティールンはどうやら、この岩の竜の名前らしい。
麻衣と由梨花さんもきて、俺の竜をみて驚いて。
なんか色々あった召還学は「キンコーンカーンコーン」チャイムの音で終わりを告げた。

「ティールン・・・ティールン・・・ティールン・・・」
そして、今休み時間。

梓は、学校に設置されている魔法図書館でティールンという名のドラゴンについて調べていた。

「ティールン・・・ドラゴンの種類って本にのってかなあ・・・」
あった、ありました。

最後のページにありました。

黒い次元の中から、岩の竜は現われる。

「・・・ドラゴンの長・・・そして、・・・」
絶句。

驚いた。

梓は、パタンと本を閉じ、元の場所にもどして それから見なかったことにした。

ティールン、それは魔王イザラムのペット。

凶悪なドラゴンの長。

ダラダラ流れてくる脂汗。

「なんで・・・って俺は何もしらない・・・何もしらねえぞ!..!」
忘れよう・・・忘れよう。

第1・5% 召還は二度とたくありません。(後書き)

誤字脱字はないように努めていますが、あるかもしれません。
見逃してください。

というか、グロ描写が入りたい……。入りたい！入りたいよー！！

なんとなく、微妙な因みにコーナー

召還にかんしてですが、精霊は召還魔法を使用する者の魔力におう
じて現われます。

魔力が少ないものは、弱い精霊

多いものは、強い精霊。

終わりっど。

色々お願いします、orz切に・・

第2% 100%の動き(前書き)

前書きって何かくわかんない人

なに書くんでしょうか・・・?

あらずじ? ああゝ・・・あとでしらべよう

第2% 100%の動き

ああ…。

怠い。果てしなく。

戦争は終わった。

昔のことか…

戦友は今何をしているだろうか？

死んだ者は今なにを見ているだろうか？

死んだ者のことは、生き抜いてしまった俺にはわからないし、戦友のことも放浪

者たる俺にはわからない。

いつか手紙を書こう書こうと思いはするが、中々かけない。

今さらなんの話をする？戦争の激しさでも笑い話にするか？

向こうには家庭がある。ない者も幸せだろう。

それをほじくり返して何になる？

俺は歩く。

果てなく歩く。

しかし止まった。

途中で止まった。

何もかもが嫌になった。世界の全てに嫌気がさした。

死んで死者にでも逢いに行くかとも考えた。

しかし、彼等は俺を敬遠するだろう。

戦場の英雄は、化け物なのだから。

それがいくら戦友であろうと、そして彼等はこう思うだろう。

命がいらぬなら、始めっから生き残るな。と。彼は独り空を見る。

薄紫の空が瑠璃色に変わるか変わらないかの境目に彼は立つ。

まるで黄昏のように。

彼の存在は黄昏そのものだった。

「召喚魔は二度としねえ…。今から選択科目外すわ。」

机に突っ伏し死体のような顔をしている梓がポツリと呟いた。

それを隣にいた秀人が気味悪気に見る。

「あれは無しだろ……………無し無し…絶対無しだ。」

「おまつ、ドラゴンなんて召喚しといてよく言うよ。」

「お前に何がわかるってんだ……………」

「75%も最高じゃねえか。」

「ファイアも失敗する確率があるんだぞ?」

「まづつかわねえよ…基本魔法なんてよ。」

「はあ。」

ため息を付くしかないだろう。

成功したのは単純に嬉しいが、魔王のペットなんかいらぬよ…。

「次…何だっけ?」

と梓は声を搾り出した。魔王のペット…堪えるわ…。

次は…と黒澤は前に張つてある時間割りを見る。

「ん、次は高級魔法だ。」

「……………」

高級魔法とは、魔法陣を二つ必要とし、「詠唱」「魔力」が重要で、最低三回の

アクションをしなければ発動できないという高度な魔法のことだ。

故に梓の成功

率は0%。

やりたくねえ…。

(「なんだあの人……」)
え?とか、う?とか声だしながらも一回ニコリッ。

(「きめえよ……」)

しかし今度は

あ、ああ

と妙に納得した表情を浮かべた。

(「なにこの人……」)

「梓……」

びくっ!と梓は右を見た。

「なんだよ」

と梓は小声で返す。

「お前が今、「こいつきめえ」とか思えたのは俺のおかげだぞ。」

「は?」

秀人は淡々と続けた。

「先生はさつき、俺らに魔法をかけようとしてきてたんだ。」

魔法………?

そのわりには軌跡も何も見えなかった。

本来 魔法とは、軌跡を青い光りでかくものなのだ。

その軌跡が見えなかった。

「あの先生の魔法は強力だつて噂だからな。」

強力な魔法……?

強さに応じて軌跡が消えていくなんて聞いたことないぞ。

「コントロール……嫌な魔法かけようとしてきやがるぜ。」

コントロール……催眠術か。

催眠術の場合、相手の目自体が魔法となるので軌跡をえがくことは
ない。しかし

、どうやって防いだんだ?

向こうは呪いだ。

本気でやられれば一生解けることはないだろう。

ニヤリと秀人は笑う。

「ダブルマジック二人魔法をなめるなよ。」

ダブルマジックとは、一人の魔力を、違う一人が使って放つ魔法のことだ。

さっきの場合、秀人が梓の魔力を使って魔法を放ったのだ。

それは三十年前に起きた、世界の戦争。

ウィザードと、ソルジャーの戦争。

貴族と平民の戦争。

革命戦争。

ウィザードは、圧倒的な勝利をソルジャーに突き付けた。

ウィザード側の被害者、僅か42人。

ソルジャー側の被害者数不明。

平民は、何を望んでいたのか？

平和か？否、平和はすでにあった。

では何だ？

答えはいたってシンプルなもの。

「名誉」だ。

遙か昔のことだ、この島国は切れ味が良い、それは魔法が発達した今でも作るこ

とは難しい刃を腰に下げたソルジャーがいたという。

そのソルジャーが確実にもっていたもの「力」「名誉」。

ソルジャーは戦いに飢える。

ソルジャーは名誉を欲す。

ソルジャーは、平和を愛してはいなかった。

「人は単純だ。俺は単純な人の闘いに巻き込まれた哀れな人だ。」
男の背には身の丈ほどある大剣がずっしりと身を納めていた。
輝く金色の髪が、髪先端が風にゆられ剣の柄に触れる。
刹那、剣が動いた。
剣はまるで血に餓えているのかのように、ゾワゾワと動く。
幻剣。
幻獣の全てを使って作る剣のことだ。
男は見つめる。
瑠璃色に染まった空を見つめる。
もうじき来る、新たな主を待つために。
男は見つめる。
空を見つめる。

「秀人、一緒に魔導師にならないか？」
本日何回目かわからぬ問い。
そして、これまた何回目かわからない返事。
「無理。俺は魔導裁判官になりてえんだ。」
はあ〜と梓はため息をついた。
ダブルマジックさえあれば、75%は関係なくなるのに…。
違う相方がすかな…と梓は遠くを見つめた。
梓の体質（成功率75%）のせいなのか否かはわからないが、梓をよく思っている。
奴はあまりいいないのだ。
入学当初は、よく寮の部屋を荒らされたものだ。今は昔のできごとだ。

「ところで梓」

男子寮に行く途中の道。魔法光で照らされた道はどこか気味が悪かった。だから

梓的には早く帰りたいかったのだが

「下行かないか？」

と秀人は指を下にさして言った。

下って…

アンダーグラウンド。

色々ある地下の国。

この学校からでも地下に行けるらしいが、定かではない。

色々あるが色々いる。

「確か、アンダーグラウンドには吸血鬼がいたは……………」

「道歩いてて、刺されました。並の確率だよ。」言い切る前に秀人がいった。

確かにそうだろうけど……………。

「まあ、来たくなければ来なくていいよ。来たかったら相田の部屋にすぎきな。」

「じゃあな。と秀人は梓に手を振ってジャンプ（空間移動）していった。

「アンダーグラウンドか……………」

無法者の国。

あんまいい噂は聞かないけど、品はそれなりらしい。

「ちょうど、魔道具が欲しかったんだよね。」行くかな。

結局行くことにした。

地下の国、アンダーグラウンドへ。

「黄昏の兵士…か。」

それは闇そのものだった。

暗く、黒く、終わりが無いような黒さがそこには広がっている。

男は戦慄した。

そして思った“殺したい”と。

だからこそ、俺が殺したいと思う価値がある奴こそ主に相應しい。

男は微笑し、膝をついて頭を下げた。

背中が震えている……。

剣の素材は勇猛なドラゴンと、英知なペガサス。背中にも振動が伝わる。（「幻

剣がここまで震える“魔”か…。」）

「貴様は、俺に忠誠を誓うか？」

グニャンと闇が人の形を作る。

男は闇を見て再び笑った。

「誓うことはできない。」

「ふむ。」

顔はないのだが、心なしか闇が笑って見えた。

余裕つてことか。

男も笑う。“も”という表現はおかしいが、闇が笑っていると仮定して、だ。

男は笑う。

「殺される。お前は俺の力になる。」

「ほー。」

ニヤッ。

刹那、男は動いた。

地面を蹴り、闇に近づく。

（「餓えているか？相棒」）

すでに幻剣の震えは違う意味の震えに変わっていた。

武者震い。

そして、餓え。

背中の柄に触れると、男は一気に引き抜き、下にふりさげた。

闇は、きれた。

いや、喰われた。

剣がグググと唸りをあげ、嬉しそうに動く。

「なるほど…。」

しかし、闇はあった。

「誓おう。我が主。」

今度の闇は、確実に笑った。

「神に好かれし、100%の黄昏よ。」

「いいか？アンダーグラウンドの入口は、この学園の地下三回の男子トイレの三

番目だ。大をするところの右から数えて三番目だぞ？」

相田佳祐は、人差し指をたて説明をした。

三番目って…花子さんか太郎君か？

「なんでそんなところが入口なんだよ。」

と梓。

「さあな」

と相田。

そして、また相田が

「準備ができてるなら今すぐいく。」

それに秀人と梓は互いを見てニヤリと笑い。

「「できてらあ」「」

と八モる。

相田もニヤリと笑って

「いざ、アンダーグラウンドへ！」
と凄いのりなり。

正直 少し不安。
でも楽しい。

アンダーグラウンドの旅…。

「一応だけど、魔ントは羽織る、あとウィザーハット、あとは、
と一回間を置いて。」

「武器だ。」

一応いっておこう。

アンダーグラウンドは無法者の国。

今は、魔法使い殺しの吸血鬼が潜んでいるという。

梓は知らない。

相田と秀人の考えを。

彼らが企む愚かな考えを、梓は知らない。

二人は魔テレパシィで会話をしていた。

《梓がいれば、75%の確率で吸血鬼に会える、はず》と相田

【そして、50%の確率で吸血鬼を倒す。】と秀人

《賞金首は、50億ライカ》

【必ず、殺す。】

二人は一つの仮説を立てたのだ。

梓は、全てにおいて75%論が適用する。

負ける確率も75

勝つ確率も75

危険な賭けだが、魔法使いは恐れない。
何故なら、不可能を可能にすることが魔法なのだから。

第2% 100%の動き(後書き)

今日は酷いめにありました・・・。

昨日も酷いめにありました・・・。

一昨日も酷いめにありました・・・(泣)

一話も二話?も見てくれた人、ありがとうございます。

初めてのかたもありがとうございます。

とりあえず、一字でも見てくれた貴方に感謝の気持ちを送りたいと思います。

「I love you」めちやくちや愛しています。

いあ、嘘ですよ?嘘っていつでもそういう意味じゃないですよ?

まあ、次の話もいつか見てやってください。

お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8874k/>

成功率75%

2010年10月12日11時56分発行